

# 150

2025 AUTUMN

## 美術館NEWS



収蔵品の紹介 Vol. 21

黒田綾山《酔翁亭図》(部分)

文化4(1807)年

絹本着色

83.0×124.7 cm



岡山県立美術館

OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

## ORIGINをめぐる旅 「平子雄一展 ORIGIN」会場より

古川 文子(学芸員)

ただいま当館では、特別展「瀬戸芸美術館連携プロジェクト 平子雄一展 ORIGIN」を開催中です。1982年岡山県に生まれた平子雄一は、1999年にイギリスに渡り、2006年にウィンブルドン・カレッジ・オブ・アートの絵画専攻を卒業しました。現在は東京を拠点に、アジアや欧米諸国にも活躍の場を広げています。近年、練馬区立美術館(東京/2022年)や、Space K(韓国 ソウル/2023年)、基隆美術館(台湾 基隆/2025年)で個展を開催し、2023年に岡山市にオープンした「岡山芸術創造劇場 ハレノワ」の常設展示作品を手がけるなど、国内外で注目を集めている現代美術作家です。

本展は、平子の故郷である岡山県で初めての大規模な個展となりました。会場には、絵画および立体作品のインスタレーションなど、数百点もの新作による展示空間が、かつてないスケールで展開しています。吹き抜けの屋内広場での大型インスタレーション(図1)や、中庭への遊具の設置(図2)等、自然光により表情を変える建築空間を活かした構成も、本展のみどころといえるでしょう。

さて、出品作家の平子雄一は、長年にわたり、自然と人間の共存関係の中に浮上する疑問やあいまいさをテーマに、制作を続けています。その発端となったのは、イギリス留学中に生じた「自然」という概念への疑問でした。ロンドンの人々が、都市の中に整備された公園を「自然」を感じる場所として訪れていることに、平子は違和感を覚えたといいます。そこから「自然」とは何かを考えるようになり、そのとらえ方が、国や地域、思想や宗教によって異なるだけでなく、時代や年代によっても、さまざまに変化し続けていることに着目したのです。また、現代社会においては、環境保護の認識のもと、「自然」を守るべきだという理想と、植物や動物などの「自然」を、原料や材料として消費し、日々の生活を維持しているという現実とが、せめぎ合い、複雑につながり合っています。こうした自然と人間の共存関係は、世界のどの地域にも存在しており、現代を生きる私たち一人ひとりにとって、決して他人事ではありません。平子本人の考案による本展のタイトル「ORIGIN」には、その「起源」や「根源」に遡って考えてみようという意図がこめられています。

さらに、「ORIGIN」には、「原点」や「源流」という意味もあり、平子自身の故郷への回帰という、もう一つのテーマが重ねられているのです。平子は、岡山県南部の郊外で少年時代を過ごしました。田んぼや用水路、藪や林などが身近にあり、虫取りや釣りといった遊びを通じて、幼い頃から他の生き物の存在を認識していたといいます。やや離れた場所から「山」の全貌を見渡し、自分のペースで近づくことで「森」や「木」の表情を知る《Tree, Forest, Mountain》の空間構成は、平子の原体験とつながっています。本展では、このほかにも随所で、瀬戸内の景物を思わせる作品や展示空間に出会うこととなるでしょう。



図1:《Tree, Forest, Mountain》2025  
図版全て ©Yuichi Hirako photo by Osamu Sakamoto



図2:「The House」監修:平子雄一 製作:株式会社ジャクエツ



図3:《Lost in Thought : Origin》2025

そして、その有終の美を飾るのが、本展最大の絵画作品《Lost in Thought : Origin》です。会場では、薄暗い展示室の壁面いっぱいに、縦3メートルを超えるF500号のキャンバス4枚を横一列に連ねた、総横10メートルにも及ぶ壮大なスケールの最新作が、スポットライトを浴びて浮かび上がります。本作は、向かって左から順に、赤や黄色を基調に山と水辺の草原の風景を描いた第1面、白い猫を胸に抱いた肖像画のような第2面、花瓶や鉢植えの植物が上下に積み重なる構図の第3面、巨大な種一粒を中央に配した第4面が、ぴったりと隙間なくつながる構成です。各々の画面が、視点や構図を大きく変えながら、ダイナミックに連携しています。本作のように、複数の独立した画面を連結し、一組の作品とする構成は、平子の絵画表現の醍醐味の一つといえるでしょう。2020年に、「I氏賞」大賞を受賞した時の出品作も、F130号のキャンバス4枚組の構成による《Leftover 5》でした。その際に「植物という自然と人間の文明を簡単な対立項で捉えるのではなく、豊富なイメージと色彩により、ひとつの画面に共存させている。大胆な描写で4枚の大作をまとめる構成力があり、組作品としてのインパクトが強い。スケールと迫りに抜kindでた現代的な絵画表現により、さらなる活躍が期待される。」(受賞者決定に係る高階秀爾選考委員長のコメント『第13回岡山県新進美術家育成「I氏賞」贈呈式」配布冊子より)と評されたとおり、構成力を充実させ、スケールを増し筆力をみなぎらせた本作は、展覧会を象徴する平子の代表作として、その後の活躍ぶりを体現しています。

最後に、本展では、すべての作品の撮影が可能です。ぜひ会場で、お気に入りの作品を探してみたいかがでしょうか。あるいは、会場を訪れた様子を動画で記録しても楽しいかもしれません。また、最終週を除く毎週土曜日には、展示室での対話型鑑賞ツアーも実施しています。来場者が思い思いのアプローチで会場をめぐり、体感する中で、平子作品のテーマについて考える機会となれば幸いです。

【特別展】瀬戸芸美術館連携プロジェクト「平子雄一展 ORIGIN」  
(会期:2025年9月16日～11月9日)

# 長尾紀壽展 — 祭り・自然・暮らし 岡山、京都から沖縄へ —

廣瀬 就久（主任学芸員）

染色家・長尾紀壽<sup>のりひさ</sup>（1940-）は岡山市に生まれました。1959年に岡山朝日高等学校を卒業後、京都市立美術大学（現：京都市立芸術大学）工芸学科に入学し、型絵染作家・稲垣稔次郎<sup>としじろう</sup>（1902-1963）の指導を受けました。稲垣の《三十三間堂内陣図屏風》（京都市立芸術大学芸術資料館蔵、1953）や《木綿地型絵染壁掛 麦の穂浪》（国立工芸館蔵、1961）、《木綿地型絵染壁掛 竹取物語》（国立工芸館蔵、1962）などの作品に接し、小さな型がくり返し構成されて、異質のものに変容する型染の魅力に惹かれました。そしてこの表現に進むことを決心したといえます。工芸学科卒業のちに専攻科染織専攻修了後、美鈴工芸株式会社（服地加工会社）設立に参画して、稲垣所属の新匠会で活動しました。

長尾は学生時代から、京都の風物、特に祭祀に興味を持ち、人間が生きていくエネルギーを祭祀から感じ取ったといえます。そしてこの祭祀を制作の糧にしたいと考え、1961年に発会した「まつり同好会」に入会します。

岡山市の裸祭り「西大寺<sup>えよう</sup>の会陽」（重要無形民俗文化財）を題材にして《湯けむる裸祭—宝木争奪<sup>しんぎ</sup>》（京都国立近代美術館蔵、1994）[図1]を制作しました。厳冬の深夜、西大寺観音院の本堂にある御福窓<sup>ごふくまど</sup>から投下される2本の宝木をめぐって、まわしを締めた多くの裸の男たちが激しい争奪戦を繰り広げる祭りです。長尾は男の全身、そして腕、掌、顔を描いた小さな図案を作成しました。これらの図案をまとめて1つの型紙を制作します。この型紙を大画面に繰り広げました。作品の下には全身が群がります。その上には顔、腕そして掌が凄まじく動きます。

長尾は洛北に伝わる「やすらい花」（重要無形民俗文化財）を繰り返し取材しました。《鎮花祭—やすらい踊り》（岡山県立岡山朝日高等学校蔵、1996）などを本展に出品します。

1995年に沖縄へ転居し、同年から2006年まで沖縄県立芸術大学美術工芸学部で教授を務めます。作品の題材は、沖縄の豊年祭、闘牛、のちにウージ（さとうきび）畑、ソテツ、ブーゲンビリアそして久高島など、同地の草花や風景へと移りました。

06年に退職してからは、那覇市から豊見城市に転居し、糸満市で農地500坪を借地して農耕を始めます。日常生活から《パッションフルーツ（楽しみの日々）》（染・清流館蔵、2008）を制作しました。また沖縄を取り巻く現状を題材にして、《群 絶滅危惧種（ヤシガニ）ハ今何処ニ》（染・清流館蔵、2017）や《フェンス I, II, III, IV》（作家蔵、2021）など、メッセージ性の高い作品を手がけています。《惜別<sup>アカカーラヤ</sup>の赤瓦家（繁茂する花豆<sup>ハナマメ</sup>）》（作家蔵、2023）[図2]を最後にして同年京都府向日市に転居しました。

出身地岡山では、長尾の作品を見る機会はずかでした。この展覧会では初期作から近作までをまとめて紹介します。

参考文献：長尾紀壽「創作ノート 発想と表現」『沖縄県立芸術大学紀要』第12号、2004年、183-184頁



図1



図2

# 近現代岡山の美術家とキリスト教 — 中川堅一の場合

橋村 直樹（学芸課長）



中川堅一《中川雪之像》1883年 本館蔵

現在、近現代日本美術史においてキリスト教に影響を受けた美術家や作品に光を当てる展覧会の準備を進めている。本展では、岡山ゆかりのクリスチヤンの美術家たちとその表現にも注目するため、ここ数回の美術館ニュースにおいて「近現代岡山の美術家とキリスト教」を連載し、これまで坂田一男、定方塊石、小田宏子を紹介してきた。今回は、幕末生まれの洋画家・中川<sup>たていち</sup>堅一（1865-1914）と彼の両親である横太郎と雪を取り上げ、信仰と芸術の接点を見ていきたい。

明治以降の近代岡山において、キリスト教の教えが根づきはじめた背景には、中川横太郎の存在が大きい\*。彼は地域の近代化を推進しつつ、精神文化の涵養にも尽力した人物である。1875（明治8）年、横太郎は神戸からプロテスタントの宣教医のワーレス・テラーを岡山に招き、自宅で説教を行わせるなど、布教活動を支援した。彼の取り組みは、1880年の岡山基督教会設立へと結実し、さらに女子教育を担う山陽英和女学校の創立にも繋がっていった。

しかし、横太郎自身は信者になることはなく、自らの生き方とキリスト教の倫理観との間に葛藤を抱えてもいた。例えば妻の炭谷小梅との関係がそれにあたる。炭谷は中川家に同居する中で自然とキリスト教に接し、その理解を深めるにつれ、自身の立場に罪の意識を抱くようになり、やがて横太郎のもとを離れてしまうのである。皮肉にも横太郎は、自らもたらしたキリスト教によって愛人を失う結果となった。なお炭谷は、のちに岡山孤児院の副院長として石井十次を助けて社会福祉活動に従事するなど、近代岡山を代表するキリスト者のひとりとなる。

一方、横太郎の正妻の中川雪は、近代岡山で最初に洗礼を受けた信徒のひとりである。禁教が解かれて間もない時期にあって、様々な偏見や差別の中でも揺らぐことなく信仰を貫いた雪の姿は、当時の女性たちの信仰のあり方を象徴しているといえる。そんな雪の肖像である《中川雪之像》を描いたのが、横太郎と雪の長子・中川堅一である。

堅一は岡山師範学校変則中学校に通い、岡山における最

初の図画教師であった平野雄也のもとで松原三五郎や原撫松らとともに学んだ。その後、京都府画学校に進み、さらに東京に出て川村清雄や松岡壽のもとで研鑽を積んだとされる。その間、1889年には大阪のキリスト教系の梅花女学校で画学教師を務め、1895年の第四回内国勸業博覧会では東京牛込区在住として油画《軍人家族》を出品している。さらに東京では、1897年から2年間、東京師範学校で地学助手として勤めてもいた。その後、1905年に帰岡してからは、岡山中学や金光中学で教鞭をとった。

堅一は、キリスト教を岡山に広めるのに貢献した父と信仰篤い母のもと、宣教師らが自宅に出入りしていた環境で育ち、青年期にはキリスト教系の学校に勤めたほか、岡山基督教会二代目牧師・阿部磯雄とも交流があった。このように、キリスト教の影響は小さくなかったと推察される。しかし晩年には過度の飲酒により健康を損ねたと伝えられていることから、キリスト教的精神から次第に距離を置いていたのかもしれない。

当館所蔵の《中川雪之像》は、堅一が18歳の時に描いた作品で、写実的な技術のみならず、母の内面に宿る静謐な信仰を表現しようとするまなざしが滲んでいる。カンヴァス裏には基督信徒中川雪肖像と墨書されており、クリスチヤンとしての母を描いたことが明示されている。

中川横太郎、雪、堅一という三者の軌跡を辿ることで、岡山におけるキリスト教受容の複雑な重層性が浮かび上がる。祈りは教会の礼拝の場だけでなく、家庭や教育、芸術といった日々の営みの中にも静かに息づいていた。《中川雪之像》には、岡山に根づいた「祈りのかたち」が今なお宿っている。

\*：近代岡山におけるプロテスタントの伝道活動の軌跡と、キリスト教と岡山ゆかりの洋画家との関係については以下が詳しい。柳沢秀行「キリスト教プロテスタント派人脈と洋画家—明治～昭和戦前期における、岡山、倉敷市域における活動の軌跡—」『現代芸術研究II』筑波大学芸術学系五十殿研究室、1998年、3-28頁。

# 岡山カルチャーゾーンミュージアムの 使い方〈あいうえお〉【動画編】

岡本 裕子(主任学芸員)

岡山カルチャーゾーン内の5つのミュージアム\*1は、「ミュージアムの使い方〈あいうえお〉【電子ガイド冊子PDF版(以下、「PDF版」)】」を、2023年度に作成しました\*2。これは、主に神経発達症とその家族や関係者をサポートする社会学習ツールです。この中では、ミュージアムでの行動の見通しが立てやすくなるよう、その様子をわかりやすい日本語(漢字にはふりがなをつける)と絵や写真による説明で示しています(図1)。神経発達症の方をはじめ、ミュージアムをはじめて訪問する方、利用に不安を感じる方など、どなたでも安心してミュージアムでの時間を過ごすことができるように、当事者や関係者、医療関係の専門家の協力を得ながら作成しました。作成する中で、利用者の特性やその時の状況に応じて「メディアが選択できる」という視点が生まれました。

そこで、選択できるメディアとして【動画編】を2024年度に作成しました\*3。【動画編】は、親しみやすいキャラクターが利用者と一緒にミュージアムを楽しみます。「ミュージアムと一緒に楽しむキャラクター」として誕生したのが、「あぎょん」です(図2)。「あいうえお⇒あ行⇒あぎょん」です。頭が「あ」のかたちで、虫っぽい謎の生物「あぎょん」は、私たちと一緒にミュージアムを楽しんでくれるキャラクターです。そして、「あいうえお」の「い(どうやって使うの?)」と「え(どうやって行くの?)」に特化した内容で作成しました。是非、一度ご視聴ください。そして、多くの方に安心してミュージアムでの時間を過ごしていただければ嬉しいです。

当館では、きっず・ミュージアム・Labで活用しました\*4。プログラムの中で【動画編】を視聴した後、展示室へ「びじゅつ たんけん」に出かけました(図3)。

今年度は、3つ目のメディアとして【漫画編】の作成をすすめています。完成予定は、2026年2月末です(ホームページで公開)。「PDF版」【動画編】【漫画編】の中から、利用者の特性やその時の状況に応じてメディアを選択して、あるいは、組み合わせさせて使っていただくことも可能ではないかと考えています\*5。

- \*1: 岡山県立博物館、岡山県立美術館、岡山市立オリエント美術館、林原美術館、夢二郷土美術館
- \*2: 岡山県立美術館ニュース146号 (<https://okayama-kenbi.info/kenbi/wp-content/uploads/2024/09/news146.pdf>)
- \*3: 右の二次元バーコードから、各館の【動画編】をご覧ください。(岡山県立博物館は【PDF版】が開きます。【動画編】は近日公開予定です。)
- \*4: きっず・ミュージアム・Lab(8月)―親子で「びじゅつ たんけん」×「やさしい日本語」―(2025年8月実施)
- \*5: 岡山カルチャーゾーンミュージアムの使い方〈あいうえお〉【PDF版】【動画編】【漫画編】は、令和5-7年度 文化庁Innovate MUSEUM事業



- あ 岡山県立美術館は どんなどころ?
- い 岡山県立美術館を どうやって使うの?
- う 岡山県立美術館には どうやって行くの?
- え 岡山県立美術館で できること
- お 岡山県立美術館からの メッセージ

**特徴**

短い文章  
わかりやすい表現  
みやすい文字の形  
漢字にふりがな  
絵や写真による説明

「あいうえお」は、ミュージアムに行ったことがない人、行くことに不安を感じている人など、だれでも活用できます。

図1:美術館ホームページの【PDF版】紹介ページより抜粋



図2:あぎょん



図3:きっず・Lab(8月)記録画像



## 展覧会スケジュール

9月16日|火| - 11月9日|日|

**【特別展】**  
**瀬戸芸美術館連携プロジェクト**  
**平子雄一展 ORIGIN**

植物と人間の共存関係の中に浮上するあいまいさや疑問をテーマに、スケールの大きな絵画および立体作品を発表し、国内外で活動を展開する現代作家・平子雄一の大規模個展。1982年岡山県出身の平子は、2006年にウィンプルドン・カレッジ・オブ・アート 絵画専攻を卒業後、現在は東京を拠点に、アジアや欧米諸国でも精力的に作品を発表し、注目を集めています。本展では、美術館の建築を活かした迫力ある展示空間を構成するとともに、対話型鑑賞なども取り入れ、同時代の美術の魅力を発信します。

10月  
October

9月20日|土| - 11月3日|月・祝|

**【岡山の美術展】**  
**長尾紀壽展**

長尾紀壽(1940-)は岡山市生まれです。京都市立美術大学(現:京都市立芸術大学)工芸学科に入学して型染作家・稲垣稔次郎に師事しました。西大寺会陽など祭りの風景を手がけます。その後1995年に沖縄へ転居し、2006年まで沖縄県立芸術大学で教授を務めました。沖縄の豊年祭、闘牛、のちに沖縄を取り巻く現状などを題材に取り上げています。出身地岡山の美術館で、初作から近作までの作品をまとめて紹介する初の展覧会です。

11月  
November

11月13日|木| - 11月30日|日|

**【特別展】**  
**第72回 日本伝統工芸展 岡山展**

11月20日|木| - 12月26日|金|

**【岡山の美術展】**  
**第30回 伝統工芸諸工芸展**

12月  
December

\*最新情報は岡山県立美術館HPをご確認ください。  
<https://okayama-kenbi.info>

11月29日|土| 15:00-17:00

**特別座談会 「土の魅力ー  
備前焼の未来を語ろう」**

パネリスト(備前焼作家)  
隠崎隆一氏、豊福博氏、石田和也氏  
進行 福富幸(当館副管理者)  
会場 2階ホール(当日先着、定員200名) ※要当日観覧券



収蔵品の紹介 Vol. 21  
黒田綾山《酔翁亭図》  
文化4(1807)年 絹本着色 83.0×124.7cm

北宋の詩人・欧陽脩は左遷先に構えた酔翁亭で酒宴を開いた。自身は酒ではなく山水を楽しむのだという。投壺や囲碁、釣りに興じる人々の賑わいから少し離れて、楼閣の中で遠くを見遣る翁がその人であろう。綾山は同主題作の構図を用いつつ、飛び交う鳥や色づく草花を鮮やかに描き、四季のうつろいを楽しむ文人の姿を表した。(森田)

藤田嗣治×国吉康雄×坂田一男

守安 収

37年ぶりに英国を訪れました。前はロンドンのみでしたが、私的な旅の今回はエディンバラからロンドンまで8日間。自然も街並みも美術館も堪能しました。大英博物館やナショナルギャラリーなどはすべて無料という施策の恩恵をさんざん被り、かつ昼からビールという極楽生活。とにかく日本の博物館のように観覧料高騰の波が押し寄せて気軽に利用できないのとは大違い。誰もが活用できる形に転換すること、それがもたらす効果はきわめて大きいはず。▼帰国後は兵庫県立美術館の『藤田嗣治×国吉康雄二人の平行キャリア—百年目の再会』展へ。斬新な展示構成と図録の充実ぶりは感動ものです。国吉は私どもの館蔵品と寄託品の福武コレクションとが多くを占めており、使っていただいて感謝です。私は1988年の開館前から洋画部門で当館の柱になるのは坂田一男と国吉の二人と考え、可能な限り収集したいと願っていました。現在、坂田はご遺族からの寄贈もあって充実し、国吉についても福武コレクションのおかげで、両者は質的にも数的にも国内有数(随一といってもよいのかも)と自負しています。彼ら二人には熱烈な応援団が存在するものの、展覧会での入館者数は今一つ。坂田は抽象画なので戸惑う方が多いのですが、国吉は画面構成が巧みでマチエールは堅固、そして一枚の絵から幾つもの物語が作れるほどの情緒性を有しています。彼ほど完成度の高い画家はそんなにいないと思うのですが…。▼藤田と国吉には海外移住者という共通点があり、坂田もパリで13年間暮らしていました。国吉と坂田はともに1889年岡山市の生まれ。当館は彼らの作品がみんなの心に定着するように努める責務を負っています。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48  
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648  
Email [kenbi@pref.okayama.lg.jp](mailto:kenbi@pref.okayama.lg.jp)  
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から  
・徒歩15分  
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分  
・宇野バス 四御神、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩3分  
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)  
夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

### 編集後記

中西ひかる

熱中症アラートも発令されるほどの暑い日が続いていたことが嘘のように、秋らしい涼しい日が増えてきました。さて、今号で紹介した特別展示「長尾紀壽展」と同じ会場では、「岡山美術展」も開催しています。今年の第4期にあたる本展では、同時開催の「平子雄一展」にあわせて、コレクションの中から「自然」をテーマに、作品をピックアップしております。作品の中で、「自然」というものがどのような役割を果たしているのか、今回の表紙を飾った黒田綾山『醉翁亭図』も展示されておりますので、ぜひ表現の中の「自然」にもご注目ください。